

東アジアにおけるエスニックヒエラルキーに関する研究

—Mokken Scale Analysis による EASS 2008 データの分析—

五十嵐 彰

ユトレヒト大学大学院社会行動科学研究科修士課程

Consensual Ethnic Hierarchies among the East Asians:
Mokken Scale Analysis with EASS 2008

Akira IGARASHI

Faculty of Social and Behavioural Sciences

Universiteit Utrecht

In this study, I investigate ethnic hierarchies in East Asian countries (China, Japan, South Korea, and Taiwan) with Mokken scale analysis. Ethnic hierarchy is defined as a sequence of preference for foreigners. For example, former empirical studies have revealed that the Western people are at the top of the hierarchy, whereas Asian people are at the bottom among the Japanese. Yet, the conventional methods of statistics are not able to detect whether the hierarchy is consensual or not. In addition, the ranking of the hierarchy may be changeable among people with high East-Asian identification or different demographic characteristics. I analyse EASS 2008 data using Mokken scale analysis to overcome these problems. Results show that the hierarchies are consensual among samples of each country/region. In Japan and South Korea, the hierarchies are stable across subgroups, while in China and Taiwan, the hierarchies are influenced by personal characteristics.

Keywords: Mokken scale analysis, EASS 2008, Ethnic hierarchy

本研究では東アジア各国・地域（中国、日本、韓国、台湾）におけるエスニックヒエラルキーを Mokken scale analysis を用いて検討する。エスニックヒエラルキーとは外国人に対する好意のヒエラルキーを指す。例えば従来日本では“西洋人”が最も好意的に、“東洋人”が非好意的に見られてきたといわれているが、このようなヒエラルキーが日本人間で「共有」されているかどうかを実証した研究はまだない。更にこのヒエラルキーは個人の属性や信条、例えば東アジアに対して高い愛着をもつ場合などによって変わりうるため、このような言説が想定されるあらゆる個人に当てはまるかという疑問である。本研究では EASS 2008 のデータを Mokken scale analysis によって分析し、東アジア諸国・地域それぞれにおいてヒエラルキーが共有されているかを検討した。結果は、それぞれの国・地域全体ではヒエラルキーが共有されており、日本と韓国では順位が個人の属性に影響されないが、中国と台湾では個人の属性によってヒエラルキーの順位に大きく差が出ることが示された。

キーワード：モケン尺度分析、EASS 2008、エスニックヒエラルキー

1. はじめに

近年東アジア各国で特定のエスニック・グループを対象とした排外的な態度や言動が増加傾向にあるとあってよいだろう。このような言動はしばしば社会経済的地位の低さなど個人的な側面に起因するとされがちだが（山本・松宮 2010）、社会全体でも特定のグループを下位に見る傾向にある。例えば日本や韓国では、西洋人への憧憬とアジア人軽視が広く根付いていると考えられる。調査で得られた外国人に対する好意の平均値比較からもこの認識は支持されている（田辺 2008；石井・小針・渡邊 2013 など）。しかしながら、このような従来用いられてきた手法では、社会的傾向から離れた個人がどの程度存在するか、統計的に十分な数の個人がこの認識を支えているか不明であり、さらにエスニック・グループに対する順位づけは、個人のアジアに対する愛着などによって変動する可能性がある。換言すると、外国人への好意の順位が東アジアそれぞれの国・地域内で“共有”されているかという問いは未だ回答されていないといえる。本稿で取り組む問題は二つ、東アジア諸国・地域で、エスニック・グループへの好ましさを順位づけた場合、その順位は共有されているのか、そして個人の属性や信条などに関わらず共有されているか、である。本稿ではこれらの問いを Mokken scale analysis により EASS 2008 のデータを用いて検証する。

2. エスニックヒエラルキー

分析の枠組みとして、エスニックヒエラルキーを用いる。エスニックヒエラルキー (ethnic hierarchy) とは、(国民も含めた) あるエスニック集団が共有する、国内の複数のエスニック・グループに対する好ましさの順位である。ヒエラルキーに対するイメージは集団内で比較的固定しており、エスニック・グループに対して個人がもつ偏見などとは無関係にヒエラルキーが共有されているとする研究もある (Verkuyten & Kinket 2000; Kleinpenning 1993)。ヨーロッパや旧ソ連、東南アジアにおいてエスニックヒエラルキーは研究されてきた (Frake 1996; Hagendoorn et al. 1998; Verkuyten, Hagendoorn, & Masson 1996)。国によってヒエラルキーを構成するエスニック・グループは異なっているが、これらの研究では国民に共有されたヒエラルキーが存在する、という点で合意を得ている。

エスニックヒエラルキーには三つの種類、内集団選好 (in-group preference)、ヒエラルキーの内集団共有 (in-group consensus)、ヒエラルキーの集団間共有 (intergroup consensus) がある。内集団選好とは、自らが属する集団をヒエラルキーの最上位に置くことである。ヒエラルキーの内集団共有とは、同一の順位・並びであるエスニックヒエラルキーが集団内で共有されていることを示す。ヒエラルキーの集団間共有とは、ある国(地域)に住む異なるエスニック・グループが、同一のエスニックヒエラルキーを共有していることを示す (Hagendoorn et al. 1998)。例えば日本に住む日本人と韓国人が日本におけるエスニックヒエラルキーに対して同様のイメージを持っている場合、ヒエラルキーが集団間で共有されているといえる。研究によってはこれらを全て網羅したもの (Hagendoorn et al. 1998; Verkuyten et al. 1996) や、内集団共有のみのもものもある (Verkuyten & Kinket 2000)。本稿ではデータの限界から、ヒエラルキーの内集団共有について考察する。

ヒエラルキー内の順位はいくつかの要因によって規定されていると考えられている。文化的近似性がヒエラルキーの一つの説明として用いられてきた (Hutnik 1991; Verkuyten, Hagendoorn, & Masson 1996)。これは自文化に近い外集団をより高順位に位置づけるという傾向である。例えばオランダ人のもつエスニックヒエラルキーは、オランダ人を最上位とし、ヨーロッパの一カ国としてのスペイン、そしてオランダ領であり現在も公用語としてオランダ語を用いているスリナムが続く。ヒエラルキーの下位にはモロッコとトルコが位置しているが、これらはオランダの文化からは遠い国だと認識されている (Sniderman & Hagendoorn 2007; Verkuyten, Hagendoorn, & Masson 1996)。文化的に近似な外集団が高順位に置かれる理由として、社会的アイデンティティが考えられる。社会的アイデンティティでは、自らが所属するある社会的集団(例えば日本人)への帰属意識がその集団に対してよりポジティブな態度に帰結するとされている (Tajfel & Turner 1979)。ポジティブな態度は文化的に近い外集団に対してより波及しやすくなり、結果的に、文化近似性に即した順位が付けられることになる。

3. 東アジアにおけるエスニックヒエラルキー研究

3.1 共有の問題

東アジアにおける外国人に対する好意の順位は経験的に研究されているものの、あくまで順位の同定のみにとどまっている。田辺（2004a, 2004b, 2008）は日本における好意の順位に関して継続的に取り組み、西洋人が高順位に、アジア人が低順位に位置することを示してきた。韓国・台湾における好意の順位は石井らが取り組んでいる（石井 2013; 石井・小針・渡邊 2013）。韓国では日本と同様に、西洋人が高順位、アジア人が低順位という形になっている。台湾では日本人が最も好まれ、西洋人、日本以外のアジア人と続く。中国における研究は筆者の知る限り行われていない。これらの研究において、順位の検定には平均値・標準偏差の比較という手法が用いられてきた。しかし平均値・標準偏差の比較のみでは、順位が個人間で“共有”されているかという問いに答えることは出来ない。

順位が共有されている状態を、擬似的なエスニックヒエラルキーを例にとって解説する。図1に順位が共有されている場合、図2に共有されていない場合を示した。回答者は、対象となる外国人に対して好意を抱いていない場合は0を、好意を抱いている場合は1を対象ごとに回答する。回答はガットマン尺度として並び替えられている。ガットマン尺度とは、ある基準（好みや困難さなど）をもとにした順位が回答者内に存在することを前提とし、回答の傾向によって項目を並び替えることで、項目間の順位を明確化する方法である。従来の手法の問題点は、図1・2でいう合計値のみを見て結論づけていたと例えることができる。図1・2両状況において、合計値から、回答者はインド人を低順位に、オランダ人を高順位に位置づけていることがわかる。しかしながら、回答者間の外国人に対するイメージは図1と2で全く異なっている。

回答者1	0	0	0
回答者2	0	0	1
回答者3	0	1	1
回答者4	1	1	1
回答者			
対象の外国人	インド人	ロシア人	オランダ人
合計値	1	2	3

図1 順位を共有している場合

回答者1	0	1	0
回答者2	0	0	1
回答者3	0	1	1
回答者4	1	0	1
回答者			
対象の外国人	インド人	ロシア人	オランダ人
合計値	1	2	3

図2 順位を共有していない場合

ガットマン尺度の特徴として、ある項目に賛成した場合、以降の上位項目全てに賛成するというものがある。例えば図1において回答者3はロシア人を好ましく感じているため、（合計値からみて）より好意を抱かれているとされるオランダ人も同様に好ましいと感じている。回答者4はインド人を好ましいとしており、以降の全ての外国人に対して好ましさを感じている。つまり、外国人に対する好ましさの合計値が、そのまま回答者それぞれの外国人への好ましさのイメージを表しており、回答者は好ましさの順位に沿った反応を示している。ここから、回答者間で外国人の好ましさの順位が共有されているといえる。

他方、図2では、回答者間にこのようなコンセンサスは存在しないが、好ましさの合計値は同様であり、依然としてオランダ人が最も好ましいとされている。しかし、例えば回答者1はロシアを好ましいと感じているにも関わらず、オランダ人には好ましさを感じていない。回答者5も同様に、全体で見れば好ましくないはずのインド人を好ましいとしている一方で、ロシア人を好ましくないとしている。このように、項目間の順位の共有を想定出来ない場合をガットマンエラーと呼ぶ（Van Schuur 2003）。先述した田辺の記述統計ではガットマンエラーの可能性を排除しきれないため、外国人への好意のヒエラルキーが日本人に共有されたものかどうか、結論付けることが出来ない。「分析」の節

で詳述するが、本稿で用いる Mokken scale analysis はこの問題に対処している (Mokken 1971; Van Schuur 2003)。

3.2 個人の属性・信条に関する問題

二点目の問いとして、エスニックヒエラルキー内における順位が個人の属性や信条によって左右されるか、を検証する必要があるだろう。性別・年齢・学歴などのデモグラフィックな属性に加え (山本・松宮 2010)、本稿では東アジア・アイデンティティを考察する。これらはとくにアジア人に対する個人の態度を変動させると考えられる。

デモグラフィックな属性は外国人に対する態度を形成する要因となっている。日本において女性は外国人に対してより否定的な見方をすることが示されている (大槻 2006; 田辺 2002)。学歴も外国人に対する態度を好意的なものにすることがわかっている (大槻 2006; 永吉 2008)。これらの変数はあくまで外国人全般に対する態度に関する研究であるため、ヒエラルキーにどの程度影響するかは不明だが、他方でオランダにおけるエスニックヒエラルキーに関する研究では、年齢が若ければ全体的に見て忌避される集団に対してより好意的な順位づけをすることが示されている (Verkuyten & Kinket 2000)。

アジアに対して強く帰属意識を持つ人の中では、アジア圏の人々がより好ましいグループとして認識されていると予想できる。理由は二つあり、一つはアジア全域に対して強い帰属意識をもっていればアジアを文化的に近い集団としてより意識しやすくなり、エスニックヒエラルキーの文化的近似性の性質から、アジア出身者のヒエラルキー内の順位が上がるというものである。もう一つの理由として、上位アイデンティティ (superordinate identity) による説明があげられる。上位アイデンティティとは、自らが社会的に属している集団 (e.g. 日本) よりも上位の集団 (e.g. アジア) に対する帰属意識を意味する。高いレベルの上位アイデンティティは上位集団の構成員に対する好意を導く (Gaertner et al. 1999)。よって、東アジア・アイデンティティが高い個人は、東アジア圏出身者をより高い順位として認識すると予想できる。

4. 分析

4.1 分析手法

本研究では Mokken scale analysis を用いてエスニックヒエラルキーを分析する。従来ヒエラルキーなど階層的関係をもつとされる項目はガットマン尺度として研究されてきたが、ガットマン尺度にはヒエラルキーを想定しない回答者 (すなわち項目間の大小関係が他の回答者から予想されるものと異なる回答者) に対処できないという問題があった。前述したガットマンエラーである。Mokken (1971) は Mokken scale analysis と呼ばれる分析手法を考案し、ガットマンエラーを確率論の見地から解決しようと試みた。Mokken scale analysis は単調等質性 (monotone homogeneity) と二重単調性 (double monotonicity) からなる (訳語は徳吉・岩崎 (2014) から) (Mokken 1971; Van Schuur 2011)。単調等質性では、ガットマンエラーが無視できる程度の頻度で起こっているかどうか、本稿に当てはめるとある集団内 (本稿では日本人内) でエスニックヒエラルキーが共有されているかどうかを検定する。Loevinger (1948) の H 係数を用い、H が 0.3 以上であれば、同様の基準を元にした項目間の順位関係が共有されていると結論づけられる。0.3 以上 0.4 未満であれば弱い単調等質性、0.4 以上 0.5 未満であれば中程度の単調等質性、0.5 以上であれば強い単調等質性があるとされる (Mokken 1971)。H 係数は項目ごとでも算出され、H 係数が 0.3 を超えている項目は順位を構成する要素となっているといえる。

二重単調性では、単調等質性で想定された順位があらゆる個人に当てはまるかを検討する。言い換えると、個人の属性や信条などによって順位が変わらないかを分析する。二重単調性にはいくつかの方法があるが、本研究では restscore 分析と下位集団間比較の二つの方法を用いる。Restscore 分析では、対象となる項目値の高低により任意の数の集団を作り、その集団間でも同様の順位が見られるか

を分析する。Restscore では CRIT 値という分析値を用いる (Molenaar & Sijtsma 2000)。CRIT 値はガットマンエラーの頻度と程度によって順位を構成している各項目に対して振られる値で、これが 60 を超える場合、その項目の順位が個人の属性や信条によって大きく変動することを示している。次に、ある集団を下位集団 (e. g. 男女、低年齢・高年齢など) に分け、下位集団間で単調等質性の検定でみられたものと同様の順位が想定できるかどうかを分析する。ここでは CRIT 値によって得られた結果を、実際に集団を分割して検討する。これらの処理により、群間で極端に異なる順位づけがなされていないか、同時に CRIT 値により群間での順位の違いが重要視されるほど大きいものかを統計的に分析する。

具体的な手順として、以下のように分析する。まずエスニックヒエラルキーを構成する変数の平均値を算出し、数値順に並び替える。このヒエラルキーに対し単調等質性が想定できるかを H 係数を用いて検討し、その後二重単調性の分析にうつる。Restscore で CRIT 値を算出し、計量的に個人の特性がヒエラルキー内順位に影響を及ぼしているかを分析する。次にサンプルを下位集団に分割し、集団間での順位の差異をみる。二重単調性のため下位集団の分割基準として、男女、年齢、学歴、東アジア・アイデンティティの高低を用いる。R のパッケージは mokken を用いる (Van der Ark 2007, 2012)。

4.2 データ

データは 2008 年に実施された東アジア社会調査 (East Asian Social Survey, 以後 EASS 2008) を用いる。EASS 2008 は日本、中国、韓国、台湾で、18 歳以上 (日本は 20~89 歳) の男女を対象として行われた。Mokken scale analysis は欠損値があるデータを分析できないため、エスニックヒエラルキーを構成する「社会的距離」項目の一つでも回答していない参加者は除外した。分析に用いる回答者は、日本 1,977 人、中国 3,008 人、韓国 1,481 人、台湾 1,935 人だった。

4.3 変数

エスニックヒエラルキーを構成するため、「社会的距離」に関する質問を用いる。社会的距離は「あなたは、次にあげる国や地域出身の人が [ある状況] について抵抗なく受け入れることができますか、それともできませんか。以下の出身地それぞれについてお答えください」という質問で測定され、「同じ職場で働くこと」「近所に住むこと」「国際結婚によって親類になること」という三つの状況が質問ごとに回答者に与えられた。回答者はそれぞれの状況について出身地ごとに回答した。出身国・出身地は「中国」「日本」「韓国」「台湾」「東南アジア」「ヨーロッパ」「北アメリカ」のうち、自国を抜かした六ヶ国・地域であり、回答者は各国・地域に対して「受け入れることができる」(ダミー値 0) か「受け入れることができない」(ダミー値 1) で回答した。

東アジアにおけるエスニックヒエラルキーを考察するため、国・地域ごとに上記の三つの状況を平均した点数を算出する。社会的距離の平均値が小さければ当該エスニック・グループはヒエラルキーの上位に位置することを示す。社会的距離が低い順にエスニック・グループを並び替え、エスニックヒエラルキーを導き出す。

二重単調性の検定のためにサンプルをいくつかの基準を用いて二分する。まず性別を軸に男女にグループ分けする。学歴は最終学歴が中学校・高校のグループと大学以降のグループに分ける。年齢と東アジア・アイデンティティは平均値以上と未満のグループに分ける。各基準で二グループが形成され、グループごとにエスニックヒエラルキーを再構成し、比較する。東アジア・アイデンティティは「あなたは、次の地域(「東アジア」)にどれくらい愛着がありますか」という質問に対し、「まったく愛着がない(1として分析)」から「かなり愛着がある(4として分析)」によって回答された。

5. 結果

東アジアのエスニックヒエラルキーを表1にまとめた。社会的距離の平均値が低いグループはヒエラルキーの上位に位置する。日本および韓国では、北アメリカ・ヨーロッパ出身者はヒエラルキーの上位に、アジア出身者はヒエラルキーの下位に属していると認識されていることがわかる。中国・台湾では西洋・東洋という分け方より多少複雑な順位となっている。中国においては台湾・韓国人がヒエラルキーの高位に、日本人がヒエラルキーの低位に属する。台湾では西洋各地域がヒエラルキーの高位に属しているが、最上位は日本であった。また中国における台湾の順位は高いが、台湾での中国の順位は低い。

各国・地域における全体の H 係数が 0.5 以上なため、これらヒエラルキーはそれぞれの国・地域の回答者に広く共有されているものだといえる。また項目の H 係数がそれぞれ 0.5 以上であるため（ただし台湾においては中国の項目 H はやや低い）、各グループはヒエラルキーを構成するのに必要な項目だといえる。以上の点から東アジア諸国・地域でのエスニックヒエラルキーの単調等質性が示された。

表1 東アジアのエスニックヒエラルキー

順位	日本				韓国			
	グループ	平均値	項目 H	CRIT 値	グループ	平均値	項目 H	CRIT 値
1	北アメリカ	.818	.853	76	ヨーロッパ	.636	.747	34
2	ヨーロッパ	.835	.847	77	北アメリカ	.671	.838	36
3	台湾	.950	.877	41	日本	.674	.842	63
4	韓国	1.020	.835	44	台湾	.753	.796	35
5	東南アジア	1.055	.871	37	中国	.797	.828	45
6	中国	1.154	.848	91	東南アジア	.820	.840	5
	全体 H		.658		全体 H		.855	
	信頼性		.954		信頼性		.964	
順位	中国				台湾			
	グループ	平均値	項目 H	CRIT 値	グループ	平均値	項目 H	CRIT 値
1	台湾	1.038	.610	98	日本	.548	.565	97
2	韓国	1.540	.686	131	北アメリカ	.707	.645	129
3	ヨーロッパ	1.659	.644	132	ヨーロッパ	.745	.646	133
4	東南アジア	1.661	.635	127	東南アジア	.992	.614	98
5	北アメリカ	1.784	.676	115	中国	1.019	.456	194
6	日本	2.051	.687	151	韓国	1.058	.580	100
	全体 H		.815		全体 H		.583	
	信頼性		.955		信頼性		.890	

二重単調性の検討に移る。ここでは個人の属性や信条によってこのヒエラルキー内の順位が変動しないかをみる。表1の CRIT 値から、日本においてはヒエラルキーの中間位、台湾・韓国・東南アジア出身者の順位が固定していることがわかる。中間の順位が変動しづらいため、CRIT 値が 60 を超えるヨーロッパ・北アメリカ・中国出身者の順位も大幅な変動は見られないと予想される。例えばヨーロッパ出身者が北アメリカ出身者より高位に来る、などといった程度であろう。韓国におけるヒエラルキーはより強固であり、日本人の順位以外は大幅な変動を見せないことがわかる。他方で中国と台湾の CRIT 値は 60 以下のものがなく、ヒエラルキーの順位は個人の属性や信条に大きく左右されることがわかる。

表2以降に、任意の下位集団間のヒエラルキー順位を示した。エスニック・グループは表1で得られた結果を反映し並び替えてある。全体の H が、台湾のいくつかの群を除いた各群で 0.5 以上であ

ることから、これらの平均値の並びは階層的になっているといえる。日本および韓国におけるエスニックヒエラルキーは比較的強固であった。日本においては表1の順位と比較し、年齢間・学歴間、また女性はヒエラルキーの順位が変化しないことがわかる。男性は東南アジア出身者を韓国人より好むことが見て取れる。韓国において女性と高齢者では、日本と北アメリカ、中国と台湾の順位がそれぞれ逆転している。

中国人男性・若年層はヨーロッパ出身者より東南アジア出身者に対してより好意的だといえる。加えて中国では学歴が順位変動の大きな要因になっていると考えられる。表1の結果と比較して、高卒以下の回答者ではヨーロッパの順位が下がっているが、大学まで通った回答者の間ではヨーロッパと北アメリカの順位が上がっている。

表2 日本における二群比較による二重単調性の確認

	性別		年齢		学歴		東アジア ID	
	男	女	低	高	高卒以下	大学	低	高
N	940	1,037	942	1,035	1,244	715	1,317	641
北アメリカ	.761	.870	.538	1.072	1.006	.476	.889	.646
ヨーロッパ	.770	.894	.544	1.100	1.041	.484	.916	.644
台湾	.852	1.039	.711	1.168	1.141	.618	1.060	.704
韓国	.993	1.046	.794	1.227	1.184	.733	1.149	.741
東南アジア	.978	1.125	.817	1.271	1.227	.735	1.195	.750
中国	1.079	1.221	.985	1.307	1.301	.894	1.283	.867
全体 H	.830	.875	.820	.871	.865	.807	.842	.873
信頼性	.960	.971	.953	.969	.967	.949	.962	.965

*表1と順位が異なるものは太字でマークしてある。以下表5まで同様の処置を施した。

表3 韓国における二群比較による二重単調性の確認

	性別		年齢		学歴		東アジア ID	
	男	女	低	高	高卒以下	大学	低	高
N	677	804	831	649	942	535	872	587
ヨーロッパ	.581	.683	.522	.783	.755	.428	.751	.458
北アメリカ	.597	.734	.539	.841	.798	.449	.786	.494
日本	.616	.723	.548	.837	.806	.443	.764	.535
台湾	.641	.847	.650	.886	.867	.553	.869	.583
中国	.744	.842	.738	.875	.883	.649	.925	.613
東南アジア	.743	.886	.742	.921	.903	.677	.945	.634
全体 H	.787	.837	.794	.831	.810	.815	.825	.777
信頼性	.949	.959	.947	.961	.955	.951	.949	.966

表4 中国における二群比較による二重単調性の確認

	性別		年齢		学歴		東アジア ID	
	男	女	低	高	高卒以下	大学	低	高
N	1,438	1,570	1,538	1,470	2,524	458	2,049	958
台湾	.997	1.076	1.067	1.010	1.024	1.118	1.104	.897
韓国	1.546	1.534	1.663	1.421	1.529	1.594	1.663	1.275
ヨーロッパ	1.639	1.676	1.746	1.575	1.693	1.463	1.766	1.431
東南アジア	1.637	1.682	1.708	1.616	1.658	1.670	1.768	1.433
北アメリカ	1.766	1.800	1.872	1.700	1.808	1.653	1.876	1.586
日本	2.043	2.059	2.139	1.968	2.051	2.052	2.169	1.800
全体 H	.630	.684	.608	.712	.684	.535	.588	.687
信頼性	.886	.915	.897	.914	.914	.858	.912	.879

表 5 台湾における二群比較による二重単調性の確認

	性別		年齢		学歴		東アジア ID	
	男	女	低	高	高卒以下	大学	低	高
N	958	977	1,020	915	1,288	647	984	944
日本	.545	.551	.418	.693	.641	.363	.728	.361
北アメリカ	.769	.647	.492	.948	.879	.366	.892	.507
ヨーロッパ	.806	.686	.489	1.031	.922	.393	.916	.559
東南アジア	1.009	.974	.890	1.105	1.012	.952	1.091	.892
中国	1.005	1.032	1.019	1.019	.992	1.071	1.123	.914
韓国	1.146	.972	.968	1.160	1.011	1.153	1.132	.984
全体 H	.587	.527	.527	.633	.642	.446	.654	.472
信頼性	.889	.892	.859	.914	.910	.817	.915	.842

台湾では女性は韓国を 4 位、中国を最下位とし、他方、男性は中国を 4 位、韓国を最下位としている。年齢も順位に影響し、高齢の回答者は中国を 3 位に、若年の回答者は中国を最下位としている。

予想に反して、東アジア・アイデンティティの高さは東アジア圏におけるエスニックヒエラルキーの順位に影響しなかった。日本において高アイデンティティ群で北アメリカとヨーロッパの順位が逆転し、韓国では低アイデンティティ群で日本の順位が上昇している。中国と台湾では高低群間で順位は変わらなかった。

6. 考察

本稿では東アジアにおけるエスニックヒエラルキーの共有を計量的に実証するため、EASS 2008 のデータを分析した。結果から、日本人と韓国人にとって、西洋人はアジア人より高位に位置しているということが示された。中国では東アジア諸国・地域の順位が高い中、日本が最下位に位置していた。台湾では日本人を最上位とし、西洋人、アジア人が続いた。Mokken scale analysis により、これらのヒエラルキーは国内・地域内で一般に共有されているものだということが同時に示された。二重単調性の検定により、これらのヒエラルキーがあらゆる個人に共有されているかを確認した。日本と韓国ではヒエラルキーがあらゆる個人にほぼ共有されているといえるが、中国と台湾では個人の属性や信条に大きく左右されることがわかった。

日本における下位集団間の比較では、研究に用いたほぼ全ての下位集団間で同様のヒエラルキー順位がみられた。これらはヒエラルキー内の中間順位の強固さからもたらされたものと推察される。韓国において CRIT 値は日本を除く全ての項目に対し基準値以下であり、本研究で扱った東アジア諸国・地域の中では最も順位が安定していると考えられる。男女間で中国の順位が大きく違うが、平均値間に大差はなく、これをもって韓国のエスニックヒエラルキーの順位が変動しやすいと結論付けることは難しいだろう。

中国と台湾では CRIT 値が基準値から大きく外れていた。高レベルの CRIT 値は中国において学歴別下位集団間の順位差として現れており、高卒以下の群では日本・ヨーロッパ・北アメリカが下位に、他方、大学進学群では北アメリカとヨーロッパは比較的高順位に位置する。学歴の向上により異文化を受容しやすくなるといわれているが (e.g. Wagner & Zick 1995)、中国ではこの傾向が顕著に出ていると考えられる。台湾では性別と年齢によって順位が大きく異なっている。高齢群では若年群に比べて中国の順位が高くなっていた。先行研究では、高齢の台湾人が中国人に対して抱く印象は決して良いものではないように思われ (佐藤 2013 など)、本研究の結果とは食い違っており、年齢による順位差への解釈には問題が残る。性別による差も理論的な説明が困難であるため、年齢と同様今後の課題としたい。

本稿では東アジア・アイデンティティの高さがヒエラルキー内の順位変動に関わると予想したが、これに反して、東アジア・アイデンティティの高低はヒエラルキー内における東アジア人の順位に影響

響しないことが示された。これは個人の属性に影響を受けやすい中国・台湾でも同様の結果であった。全体的に社会的距離の平均値を比較すると、東アジア・アイデンティティが高い値のグループの方が低い値のグループよりも外集団に対して好意的であることがわかる。よって上位アイデンティティ理論は順位の変動ではなく、外集団全体に対する好意として機能していることになる。しかし本稿で用いたアイデンティティの対象は東アジアであるため、先行研究に従うならば、東アジア出身者に対してのみ好意が上昇するはずである。本稿の結果では、ヨーロッパ・北アメリカに対する好意も上昇しており、先行研究と整合性を持たない。この点に関して更なる分析が期待される。

EASS 2008 に用いられた「社会的距離」の質問は先行研究 (e.g. Hagedoorn et al. 1998) でエスニックヒエラルキーを構成する際に用いた質問と同様のものであり、操作的定義の点から優れて互換的であるといえよう。しかしながら、いくつかデータの限界もある。本稿はエスニックヒエラルキーのひとつの側面、すなわち内集団が共用するヒエラルキーしか分析することが出来なかった。内集団選好と集団間共有の分析には至っていない。この点は社会的距離項目で内集団に関する質問にも回答を得、また国内においてエスニックマイノリティとされる調査参加者を増やすことによって克服されるだろう。これらの点が当該調査の主眼ではないにしろ、今後の東アジアにおけるエスニックヒエラルキー研究には、これらの改善点が求められる。

二重単調性の検定に用いた対照群の選択にも改善点がみられる。先行研究では偏見の度合いによってサンプルを二分し、ヒエラルキーを比較するという手順をとっているものがある。この分析が可能になれば、東アジアにおけるヒエラルキーの共有に対してより強い証拠を与えることが出来ると思われる。例えば日本において、中国人に対する CRIT 値は基準以上であったにもかかわらず、本稿では中国人の順位は一貫して最下位であった。どのような属性・態度の個人が異なる順位を持つか、というのは検討に値する課題だろう。また本稿は東アジアにおけるヒエラルキー順位がなぜこのような形になったのか、という問いには答えることが出来ない。この点に関しては先行研究によって得られた知見とヒエラルキー順位とを組み合わせる必要があるだろう。

今後の課題がいくつかあげられるものの、本稿は東アジア諸国・地域それぞれにおいて外国人に対するヒエラルキー意識が広く共有されていることを示した点で一定の価値があると思われる。社会全体に共有されたヒエラルキーの正確な認識が、集団間の関係という問題に対処する一助となることを期待する。

[Acknowledgement]

East Asian Social Survey (EASS) is based on Chinese General Social Survey (CGSS), Japanese General Social Surveys (JGSS), Korean General Social Survey (KGSS), and Taiwan Social Change Survey (TSCS), and distributed by the EASSDA.

[参考文献]

- Gaertner, Samuel, L., Dovidio, John F., Nier, Jason A., Ward, Christine M., & Banker, Brenda S., 1999, "Across Cultural Divides: The Value of a Superordinate Identity," Prentice, D. A. & Miller, D. T. [eds.], *Cultural Divides: Understanding and Overcoming Group Conflict*, New York: Russell Sage Foundation, 173-212.
- Frake, Charles O., 1996, "The Cultural Construction of Rank, Identity and Ethnic Origins in the Sulu Archipelago," Fox, J. J., & Sather, C. [eds.], *Origins, Ancestry, and Alliance: Explorations in Austronesian Ethnography*, Canberra: Australian National University Press, 319-331.
- Hagedoorn, Louk, Drogendijk, Rian, Tumanov, Sergey, & Hraba, Joseph, 1998, "Inter-Ethnic Preferences and Ethnic Hierarchies in the Former Soviet Union," *International Journal of Intercultural Relations*, 22: 483-503.

- 石井健一, 2013, 「台湾における外国イメージ調査：第一次報告」 『筑波大学社会システム・マネジメント専攻ワーキングペーパー』 No. 1305.
- 石井健一・小針進・渡邊聡, 2013, 「韓国における外国イメージ調査：第一次報告書」 『筑波大学社会システム・マネジメント専攻ワーキングペーパー』 No. 1304.
- Loevinger, Jane, 1948, “The Technique of Homogeneous Tests Compared with Some Aspects of ‘Scale Analysis’ and Factor Analysis,” *Psychological Bulletin*, 45: 507-529.
- Kleinpenning, Gerald, 1993, *The Structure and Content of Racist Beliefs*, Utrecht: Utrecht University, ISOR.
- Mokken, Robert J., 1971, *A Theory and Procedure of Scale Analysis*, Berlin: De Gruyter.
- Molenaar, Ivo W., & Sijtsma, Klaas, 2000, “User’s Manual MSP5 for Windows,” IEC ProGAMMA.
- 永吉希久子, 2008, 「排外意識に対する接触と脅威認知の効果」 『日本版 General Social Surveys 研究論文集』 7: 259-270.
- 大槻茂美, 2006, 「外国人接触と外国人意識」 『日本版 General Social Surveys 研究論文集』 5: 149-159.
- 佐藤貴仁, 2013, 「現代を生きる台湾日本語世代の日本語によることばの活動の意味」 『言語文化教育研究』 11: 391-410.
- Sniderman, Paul M., & Hagendoorn, Louk, 2007, *When Ways of Life Collide: Multiculturalism and its Discontents in the Netherlands*, Princeton: Princeton University Press.
- Tajfel, Henri, & Turner, John C., 1979, “An Integrative Theory of Intergroup Conflict,” Austin, W. G., & Worchel S. [eds.], *The Social Psychology of Intergroup Relations*, Monterey: Brooks/Cole, 33-47.
- 田辺俊介, 2002, 「外国人への排他性とパーソナルネットワーク」 盛岡清志編著『パーソナルネットワークの構造と変容』 東京都立大学出版会, 101-120.
- 田辺俊介, 2004a, 「国別好感度から見る「日本人」の世界認知—JGSS 第一次予備調査を用いて—」 『日本版 General Social Surveys 研究論文集』 3: 199-213.
- 田辺俊介, 2004b, 「近い国・遠い国—多次元尺度構成法に寄る世界認知構造の研究—」 『理論と方法』 19: 235-249.
- 田辺俊介, 2008, 「日本人の外国好感度とその構造の実証的検討—亜細亜主義・東西冷戦・グローバルイゼーション—」 『社会学評論』 59: 369-387.
- 徳吉陽河・岩崎祥一, 2014, 「自己成長主導性尺度 ii (pgis-ii) 日本語版の開発と心理的測定」 『心理学研究』 85: 178-187.
- Van der Ark, L. Andries, 2007, “Mokken Scale Analysis in R,” *Journal of Statistical Software*, 20: 1-19.
- Van der Ark, L. Andries, 2012, “New Developments in Mokken Scale Analysis in R,” *Journal of Statistical Software*, 48: 1-27.
- Van Schuur, Wijbrandt H., 2003, “Mokken Scale Analysis: Between the Guttman Scale and Parametric Item Response Theory,” *Political Analysis*, 11: 139-163.
- Van Schuur, Wijbrandt H., 2011, *Ordinal Item Response Theory: Mokken Scale Analysis*, California: Sage Publications.
- Verkuyten, Maykel, Hagendoorn, Louk, & Masson, Kees, 1996, “The Ethnic Hierarchy among Majority and Minority Youth in the Netherlands,” *Journal of Applied Social Psychology*, 26: 1104-1118.
- Verkuyten, Maykel, & Kinket, Barbara, 2000, “Social Distances in a Multi Ethnic Society: The Ethnic Hierarchy among Dutch Preadolescents,” *Social Psychology Quarterly*, 63: 75-85.
- Wagner, Ulrich, & Zick, Andreas, 1995, “The Relation of Formal Education to Ethnic Prejudice: Its Reliability, Validity and Explanation,” *European Journal of Social Psychology*, 25: 41-56.
- 山本かほり・松宮朝, 2010, 「外国籍住民集住都市における日本人住民の外国人意識—愛知県西尾市、静岡県急浜松市、長野県飯田市調査から—」 『日本都市社会学会年報』 28: 117-134.